

日時	令和2年2月4日（火） 9時15分～9時50分
科目	開講式
参加者	43名（技術者：25名，特別聴講者：18名）



主催者代表挨拶



研修会参加者・講師・スタッフ

日時	令和2年2月4日（火） 10時00分～12時00分
科目	講義 保全技術
内容	歴史的建造物の保全技術について
講師	長岡造形大学 名誉教授 木村 勉 氏
参加者	43名（技術者：25名，特別聴講者：18名）

-先人の仕事に新たな息吹を注いで歴史を引き継ぐ-

1 この講義にあたって

2 社会に広まる歴史ある建物への取り組み

(1) 歴史ある建物への理解の普及

- ・ 関心高まる「保存」「保全」のための修復
- ・ 注目されてきた産業遺産・町並み（歴史地区）
- ・ 広がる企業・個人の活動

(2) 多様化する価値と魅力，活かし方

- ・ 制度により異なる行政の支援としくみ
- ・ 方針（遺し方）の検討
- ・ 「保存」から「保存・活用」へ
- ・ とくに町並み（歴史地区）の建物の扱い
地方都市の歴史地区の実態
まちづくりとしての建物の保存・活用の対策

(3) 歴史地区の保存・活用の今日の課題

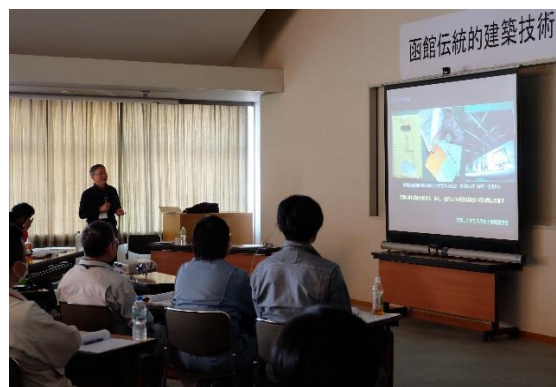
- ・ 歴史ある建物の保存・活用への取り組みにみる課題
- ・ 社会におけるさまざまな働きかけ
- ・ 文化財保存関係者の役割とその教育普及活動

3 修復の現場（とくに保全）における実務

(1) 修復の流れと「維持・保全」の役割

(2) 遺し方の方針

- ・ 価値と魅力を見出す調査
- ・ 遺し方の検討



木村講師の講義

(3) 傷んだ部分の修理

- 部材や施工自体を遺す意味
- どこまで/どの程度に/どんな方法で
木工事
石工事
左官工事
塗装工事

(4) 耐震補強

- 耐震レベルの検討
- 価値と魅力に配慮した補強方法

(5) 活用のための改修，設備の更新

- 用途と具体的な使い方
- 改修，設備類の更新と新設，附属施設の新設

4 歴史ある建物の修復に取り組む職人たちへの期待

(1) 修復の要件

(2) いま求められること

歴史ある建物を後世に残し，歴史を繋ぐため，先輩たちの技術に対してリスパクトの気持ちを持ちながら，文化財保存の知識・技術を習得するとともに，今ある技術を活かして，建物を活用することが大切である。

日時	令和2年2月4日（火） 13時00分～13時50分
科目	講義 函館の景観行政
内容	景観行政の取組と補助制度について
講師	函館市都市建設部まちづくり景観課 主査 山口 敬介
参加者	43名（技術者：25名，特別聴講者：18名）

本日の内容

- ① これまでの景観行政の取り組みについて
- ② 景観に関する規制（屋外広告物以外）
- ③ 補助制度と活用事例について



山口講師の講義

函館西部地区の歴史と魅力

- 天然の良港がもたらした開港による異文化の流入
- 大火がもたらした整然とした街区形成
- 大火がもたらした防火造建築

景観行政の取り組み

景観法の施行

自主条例

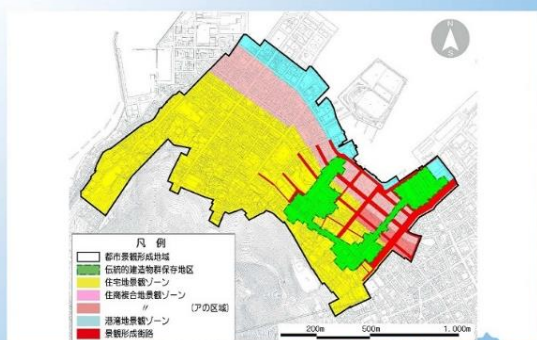
昭和63年度
函館市西部地区歴史的景観条例 制定
平成6年度
函館市都市景観条例 制定

法委任条例

平成20年度
函館市都市景観条例 改正

平成16年度 景観法 施行

都市景観形成地域の規制



活用事例



函館市の歴史と魅力を活かし、市民共有の財産として継承し、後生に伝えていくため、函館市都市景観条例を制定し、各種補助制度により歴史的建造物を適切に維持・保全しながら活用を図り、異国情緒豊かな町並み景観の形成に努めている。

日時	令和2年2月4日（火） 14時00分～14時50分
科目	講義 函館の建築と技術
内容	函館の建築史と独自の建築技術について
講師	特定非営利活動法人はこだて街なかプロジェクト 理事長 山内 一男
参加者	43名（技術者：25名，特別聴講者：18名）

1985年（昭和60年）7月，東京での19年の生活に終止符を打ち函館に戻り，仕事と生活の場所をここで決めた。その頃日本中のまちは，高度成長の余波で新築建物による再開発の動きが増していく勢いにより，まちの個性が失われかけていくような状況だった。特に地方都市は，再開発の影響が顕著に現れていた。

まちは新しいものを吸収して進化しなければならない。開発は，新しいものを生み育てる貴重な歴史的財産を遺棄して成立しない。住まう人々やまちにとって貴重な財産を活かしていく方法も，開発の一つの方法として考えられないだろうか。

函館はそのような開発の可能性を秘めている町だと確信している。

歴史的に価値の高い建物だけではなく，時代の生活の証や，歴史を伝える建物を活かすことによって，日本で唯一無二のまちになってほしいと考える。

- 1 函館の建物のルーツはどこなのか
- 2 函館の大火は町や建物に何を残していたのか
 - (1) 大火後の新しい様式と技術
 - (2) 和洋折衷防火様式の発現
 - (3) 歴史的建造物は函館の西部地区だけに建っているのか
 - (4) レンガからコンクリートへ
- 3 土壁・左官技術は寒冷地にはなかったのか
 - (1) 大火から学んだ知恵と工夫は
- 4 石造建物から人造石洗い出し仕上の建物へ
 - (1) 旧西警察署の再生・外壁



山内講師の講義

函館の建築史は北海道の開拓と関係があり，函館の建築技術は度重なる火災によって発展した。

開拓のため函館に出稼ぎに来た人々が，故郷と同じ様式の住まいを建てたことから，様々な地域の建築様式の建物が残っている。

また，建物の外壁や構造から，防火，耐火技術の変遷と工夫が見られる。一般的な施工方法とは異なり，木造建物の平瓦下地の土塗りや漆喰壁，L型コンクリートブロック構造の建築が現れ，函館独自の様式が発現することになった。

日時	令和2年2月4日（火） 15時00分～15時50分
科目	講義 改修事例
内容	歴史的建造物の改修事例について
講師	特定非営利活動法人はこだて街なかプロジェクト 富樫 雅行
参加者	43名（技術者：25名，特別聴講者：18名）

- 1 独立から自邸をリノベーションするまで
- 2 連鎖する古民家の再生
- 3 仲間との「箱バル不動産」の立ち上げ
- 4 「大三坂ビルヂング」伝統的建造物の保存・再生・活用
- 5 DIY サポーターの広がり
- 6 古民家から近代 RC 建築の再生への新たな挑戦



富樫講師の講義

独立と共に、自身で函館山麓の常盤坂にある和洋折衷の古民家を購入し、リアルタイムで古民家の再生をブログ配信し、事務所併用住宅として2年半かけセルフビルドでリノベーションを行った。その活動への共感が連鎖し、地域の古建築再生の話が舞い込む。

一枚の古写真から復元図を起こし再生した『港の庵』。共に西部地区に暮らす不動産屋やパン屋の仲間と「箱バル不動産」を立ち上げ、「函館移住計画」を開催。大正時代に建てられた伝統的建造物『大三坂ビルヂング』の再生。その一角で『SMALL TOWN HOSTEL』を運営。

令和元年に十字街にある「カルチャーセンター臥牛館」というビルを引き継ぎ、民間の文化複合施設として再生に乗り出す。

自ら行動し、道を切り開く様を紹介。その土地の景観や歴史、ストーリーを大切にしながら、身近にある素材や技術を使って保存活用に繋げている。